

☆ Society of Japan Clinical Dentistry ☆

2015年度 東京 SJCD 第3回例会のご案内

晩冬の候、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、来る3月6日に開催されます2015年度東京 SJCD 第3回例会につきましてご連絡申し上げます。まず、午前のインサーストレージングは東京 SJCD 会長の原田和彦先生にご登壇いただき、世界で注目されている「インプラント周囲炎治療」の最前線について、臨床例を交えながら系統立てて分かりやすく解説していただきます。

午後は、新たな試みではありますが「マイクロスコープ」をテーマにしたケースプレゼンテーションを行います。前半は東京 SJCD 会員2名による「審美修復治療」と「審美インプラント治療」それぞれのケースプレゼンテーション。そして後半には、ワールドスピーカーの鈴木真名先生と大河雅之先生のご両名にご登壇いただきます。そして「歯周外科医」と「補綴医」それぞれの立場から、マイクロスコープを通じたインターディシプリナリーアプローチについて総括していただきます。今回は、非常に充実した内容となっております。皆様、万障お繰り合わせの上、是非ともご参加くださいますようお願い申し上げます。

日時 2016年3月6日(日) 受付開始 9:30 / 開演 10:00~17:00

会場 都市センターホテル/コスモスホール 3F

所在地 〒102-0093 東京都千代田区平河町 2-4-1 TEL 03(3265)8211

※入場証について：必ず個人のQRコードをダウンロードしてお持ちくださいませ。

-インサーストレージング-

原田 和彦 先生 原田歯科クリニック

『国際的な観点からみたインプラント周囲炎治療の基本と臨床』

-ケースプレゼンテーション-

座長：鈴木 真名 先生

コメンテーター：大河 雅之 先生、松本 邦夫 先生

『マイクロスコープを利用した低浸襲審美修復治療』

山本 恒一 先生 スマイルプランやまもと歯科クリニック

『Peri-Implant Soft Tissue management for Advanced Periodontitis Case』

中田 典光 先生 なかた歯科

『Interdisciplinary Approach for Esthetic Dentistry』

鈴木 真名 先生 鈴木歯科医院

大河 雅之 先生 代官山アドレス歯科クリニック

<インサーストレージング>

「国際的な観点からみたインプラント周囲炎治療の基本と臨床」

原田 和彦 先生 (原田歯科クリニック)

1957年 富山県 生まれ

1982年 日本大学 松戸歯学部 卒業

1987年 原田歯科クリニック 開院

東京SJCD 会長

現在多くのインプラント治療が行われているが治療後のメンテナンスについては天然歯のメンテナンスと同様に十分なものとは言えないのが現状ではないだろうか。その結果、インプラント周囲粘膜炎、インプラント周囲炎の発症が数多く見うけられるようになってきたと思う。双方の疾患率に変動が無ければインプラント治療数が多くなっているという現状を考えると、その絶対数は比例して多くなっていると考えるのが妥当である。つまり、インプラント周囲粘膜炎、インプラント周囲炎の絶対数は今後間違いなく多くなっていくのである。この現状を考えるとインプラント治療に携わる人たちは、その治療法をマスターしていなければならない。今回、インプラント周囲炎についての情報を収集してみたが、日本におけるデータというものは殆ど存在しなかった。そして海外においても十分なエビデンスがあると思われる論文自体が少ないというのが現状であった。このひとつの原因としてあげられるのが「インプラント周囲炎」の定義がまだ確定していないということがあげられる。例えば骨1mmあるいはポケット1mmの差でその出てくるデータに2倍の差が出てしまうのである。

また現在、治療法においても暗中模索の状態であるが、そのなかでも一筋の光が見えてきている。今回は私の臨床例を提示させていただきますが、SJCDの皆さんと一緒にこの難問に挑戦していきたいと思っておりますので是非ご参加いただきたいと思っております。

<ケースプレゼンテーション>

「マイクロスコープを利用した低侵襲審美修復治療」

山本 恒一 先生 スマイルプランやまもと歯科クリニック

1999年 大阪大学卒業

2004年 やまもと歯科クリニック開院

所属団体:東京SJCD、日本歯科審美学会、日本顕微鏡歯科学会、日本口腔インプラント学会

天然歯におけるエナメル質の剛性と象牙質の柔軟性の非常にバランスのとれた特質は、歯の長期的な機能の上で理想的なものであり、他に取って代わることができないものである。患者の審美的要求が高まりつつある中で、如何に健康な歯の構造を保存しつつその要求に応えていくかという点が近年の審美歯科治療の焦点となってきている。このような治療を具現化する上で精密な作業が求められるのは当然であるが、この点においてマイクロスコープの使用は欠かせないものとなっている。今回は上顎4前歯の審美修復治療の各ステップにおいてマイクロスコープを使用し治療したケースを通して低侵襲審美修復治療のアプローチとマイクロスコープの有効性について考察してみたい。

「Peri-Implant Soft Tissue Management for Advanced Periodontitis Case
- By using Microscope -」

中田 典光 先生 (なかた 歯科)

1986年 日本大学 松戸歯学部 卒業

1992年 茨城県常総市開業

所属団体:東京SJCD、日本歯周病学会、日本歯内療法学会、日本顕微鏡歯科学会、OSI、AAP(アメリカ歯周病学会)

私が歯科大学学生だった昭和60年頃、インプラント治療が日本の歯科臨床家の間で話題にはなっていたものの、不確定な様々なインプラント治療方法が蔓延り、予後不良症例が大半を占め数年使えれば良しとされてた訳ではないが、眉唾な治療法と言う時代でもあった。当然大学教育の中に取り入れられる次元の物ではなかった。卒業当初、興味本意で受講したインプラントコースは、中空シリンダータイプで、現在陰も形も無い。しかしながら昨今インプラント治療は、条件を満たせばある程度の長期的予後を獲得し、市民権を得て、歯科医院の看板や広告に”インプラント”の文字を見かけるのが日常になった。ここ10年に至っては、インプラントの成功条件が、”よく咬めて、長期的に使用できる”から、”天然歯の様に自然に美しく見えるインプラント”を求められるような時代にもなってきた。が、特に審美領域(上顎前歯部)において、患者固有の軟組織・硬組織の条件を整えて、良好な結果を得る事が難しい事は、周知のとおりである。今回発表するケースは61歳の女性で、歯の動揺と前歯部の審美障害を主訴に、固定式修復物を希望し来院した。残念な事に重度歯周病に罹患し歯槽骨の吸収は著しく、臼歯部欠損や残存臼歯の動揺により、咬合崩壊症例であった。上顎前歯においては、歯肉の退縮、正中の歯間乳頭の消失、辺縁歯肉レベルの連続性が失われていた。前歯部に適切な修復を行うにあたり、臼歯部のパーティカルストップを優先し、インプラン埋入部位のタイミングを考慮した治療手順が必要になる。また審美的対応においては、硬組織軟組織の条件を整えていく必要がある。今回、失われた辺縁歯肉や歯間乳頭を再現するため、マイクロスコープによる拡大視野下でマイクロ・インスツルメントを使用した外科処置、いわゆるマイクロサージェリーを行った。結果として、インプラントを埋入した前歯部において、辺縁歯肉や乳頭様組織の構築が認められ審美的な結果が得られた。また咬合崩壊にもストップをかけることができ、安定した経過を経ているのでここに報告する。

「Interdisciplinary Approach for Esthetic Dentistry」

鈴木 真名 先生 (鈴木歯科医院)

1984年 日本大学松戸歯学部卒業

1989年 鈴木歯科医院 開業

2008年 鶴見大学歯学部 口腔顎顔面インプラント科非常勤講師

2009年 日本大学松戸歯学部 客員教授

所属団体

- ・日本歯周病学会 専門医
- ・日本臨床歯周病学会 指導医
- ・AAP (American Academy of Periodontology)
- ・AMED (Academy of Microscope Enhanced Dentistry)
- ・SJCD (Society of Japan Clinical Dentistry) インターナショナル 常任理事
- ・東京 SJCD 顧問
- ・OJ (Osseointegration Study Club of Japan) 特別顧問

大河 雅之 先生（代官山アドレス歯科クリニック）

1962年 岩手県出身

1987年 奥羽大学歯学部卒業

2001年 代官山アドレス歯科クリニック開院

所属団体

- ・東京S J C D副会長
- ・審美歯科学認定医
- ・顎咬合学会認定医
- ・AMED(米国マイクロスコープ歯科学会)理事
- ・奥羽大学歯学部同窓会学術部長

近年、審美修復治療における専門性はより高度になり、最良の審美的結果を得る為にはチームアプローチはかかせないものとなっている。スペシャリストが集まり、考え抜いた治療計画とそのシーケンスは無駄がなく結果としてシンプルになっていく症例が多い。

インターディシプリナリーアプローチ成功のための鍵は、治療計画段階からの専門医間の密な連携と治療のゴールのイメージを相互に共有することである。また技術的にはそれぞれの術者がマイクロスコープを応用することにより、高い精密性と予知性が得られてきている状況にある。

本講演では、インターディシプリナリーアプローチのマネージメントについて臨床症例を通して解説したい。